

りんごの歴史



1875年(明治8年)

弘前にりんごが初めて紹介されたのは、弘前の東奥義塾教師の米国人ジョン・イングが同年のクリスマスに教え子らに西洋りんごをごちそうしたのが最初とされる。この頃から新政府は、勸農政策に積極的に取り組み、種苗等の新品種を海外から求めては全国に配布していた。

1877年(明治10年)

弘前の養蚕家山野茂樹が屋敷畑(現在の弘前大学医学部)に試植していたものに初めて結実し、3個のりんごが収穫された。りんごの栽培は、先覚者たちの研究と努力によって成功の道を歩み、各所にりんご園ができるようになる。りんご栽培は廃藩置県後、旧士族への勸奨事業となっていた。

1890年(明治23年)

東京で開催された第3回国勸業博覧会で弘前のりんごは有功2等賞を受ける。その後、しだいにりんごの商品価値が認められ、鉄道の開通などもあって、東北から北海道・関東・関西に販路を広げていく。

1904年(明治37年)

画期的なりんごの袋掛け(有袋栽培)やボルドー液などの薬剤散布方法が導入され、また新しいせんてい方法が研究されるなど栽培技術が著しく進歩し、りんごの商品的地位が確立。

1906年(明治39年)

青森港が特別輸出港になり津軽林檎輸出業組合が設立され、上海などに輸出される。

1908年(明治41年)

りんご輸送に冷蔵庫が利用される。

1964年(昭和39年)

弘前市常盤坂(現在のりんご公園)で、最初りんご花まつりが開催される。

1968年(昭和43年)

みかん、いちごの大増産、バナナ輸入増等消費者の嗜好の変化等により、紅玉、国光小玉の暴落となり、山や川に大量投棄されたので、俗にこれを「山川市場」と称した。このため、不況打開の根本対策として品種更新が急速に促進。

1973年(昭和48年)

りんごわい化栽培による高性能機械化技術体系を実証し、普及の拠点とするため、りんごわい化栽培モデル園が弘前などに設置される。

1974年(昭和49年)

弘前市において、青森県りんご100年祭記念式典が挙行政され、弘前に初めてりんごを紹介した、ジョン・イングの縁者を米国から招いている。

1989年(平成元年)

第37回全国りんご研究大会が弘前市を主会場に開催。

1990年(平成2年)

青森県の平成元年産りんご販売額が初めて1,000億円の大台を突破し約1,093億円と過去最高となった。

1991年(平成3年)

台風19号がりんご栽培史上空前の被害をもたらした。

2008年(平成20年)

ひょう害があり、過去最大規模の被害をもたらした。

2023年(令和5年)

令和4年産りんごの販売額は、約1,184億円となり、9年連続で1,000億円の大台を超えるとともに、昭和55年からの集計の中で過去最高となった。

シードルの魅力

シードルはりんご果汁を発酵させてつくるお酒です。

弘前でつくられているシードルは、

生食用のりんご単一品種や

数種類の品種をブレンドしたもの、

生産過程で摘果したりんごなどを原料としています。

さらに酵母の種類や発酵の期間などつくり方の違いによって、

甘口から辛口まで様々な風味で、こだわりの詰まった

個性豊かなシードルが多数揃っています。

弘前でシードルの魅力を味わってみませんか？



弘前市りんご公園りんごの家では、弘前市内外のシードルを多数取り揃えています。

弘前市りんご公園

〒036-8262 弘前市大字清水富田字寺沢125番地

電話：0172-36-7439 ファクス：0172-36-7458

開園時期：年中無休 入園料：無料

施設利用時間：午前9時～午後5時



弘前市は 日本シードル 発祥の地！

ひろさきシードルHISTORY



1954(昭和29)年、西欧のシードルに着目した吉井勇がシードル会社として「朝日シードル株式会社」を設立。現在は弘前れんが倉庫美術館になっている場所(弘前市吉野町)で工場を創業し、日本初の本格的なシードル



「アサヒシードル」を製造しました。その製造技術は、「ニッカウキスキー」に引き継がれ、現在では「ニッカウキスキー弘前工場」でシードル製造が行われています。また、2014(平



成26)年には、弘前市が「ハウスワイン・シードル特区」に認定され、弘前市内にシードルの醸造所が増え、クラフトシードル作りが盛んに行われています。